会　報　16　　白鷹町史談会

史　　談

2011（H23）　2・15

■　「大般若」虫干しのこと

―東横田尻金澤寺　馬鳴堂の面付を中心に―

1

一昨年の八月、横田尻の金澤寺馬鳴堂内にある「大般若」の虫干しを行った。横田尻区、金澤寺の関係者と有志の協力を得て、一日がかりで無事に終えることができたのは何よりだった。

そもそもこの「大般若経」は約六十五年余りの年月、蔵の中に入ったままでその存在を忘れられていたのである。中には虫に食われていたものもあり、箱の中から羽化した虫がぞろぞろ出てきた時は、その場にいた人が驚きの声をあげたものである。

2

虫干しから一ヶ月余りがたち、堂内にある三種類、四枚の面付の内容が、ほぼ明らかになってきた。免付は「大般若」の分、経を保管するための宝蔵の分、馬鳴菩薩の分が二枚の、計四枚である。

まず万延元年の年号の入った「大般若」の分の面付には七十七人の寄付者の名前があり、金額の合計は、三十四両一分五百文になった。ただ、お経が入っている六つの箱書きは文久二年であり、寄付を募った時期とはずれている。

明治十二年に建てられた宝蔵、すなわち「馬鳴堂」の分は八十二名の寄付で、合計の金額は五十九円九十五銭だった。

翌年の明治十三年には馬鳴菩薩が求められ、現在の東田尻分の寄付が七十六名で十四円六十八銭、西田尻分の寄付が七十三名で六円七銭四厘、合計で百四十九名、金額は二十円七十五銭四厘という数字がでてきた。（計算の方法に一抹の不安がないでもないが・・・。）

ただ、これらの面付の合計額が経本、経蔵、馬鳴菩薩像とすんなりと一致するかは、集められた寄付金の使われた詳細が不明であることからして、別の問題であろう。

今回は面付をデジタルカメラで撮影して、ＣＤにした。こうすることでいつでも見ることができ、しかも拡大、印刷が自在になった。また、情報を共有することで、調査の障害を排除することができるようになった。かつて絵馬調査をした頃はまだデジタルカメラがなかったから、フィルム・現像と大変だった。

3

さて、以下は疑問と気がついた点のいくつかである。

１、　万延元年の面付からお経の入った箱書きの文久２年までの時間は、注文してから、経巻が届くまでの時間だろうか。

２、　経巻のうち第六百巻目はどこにいったのか。最終巻の奥付を確認できないので、お経がいつ、どこで作られたかは不明である。ただ、この種のものはいくつかあり、白兎の全龍院にあるものと同じ版形や体裁であることから、京都の「近藤般若堂」で作られた寛文の版木で摺られたものとみられる。

３、　お堂の正面に書かれている梵字（キャ）は、馬鳴菩薩を表すことになっているが、お堂を建てる時点で仏像を買い求めることを予定して書かれたのだろうか。同じものは高玉の円福寺にも見える。

４、　新年の「お大般若」の時に新しく摺られたお札が配られるが、古いお札は処分されたとしても、版木はどこかに残っていてもよいはずで、お堂の棟札に「高徳寺」の文字が見えることから、その方面にあるかもしれない。

５、　発願主の丸川白龍は文政六年七月四日、横田尻１４７２番地の丸川久右衛門の三男として生まれた。今の横田尻の信夫屋・丸川健一氏の家から出た人で、明治二十年八月、渡部為吉に附籍となっている。没年は不明。約三十七歳で「大般若」の発願主となっていることになる。

６、　それぞれの面付に表れる人数は七十六人から八十二人で、現在の東横田尻地区の約半分である。これはこの後に養蚕の興隆があり、外部から相当の人たちが移動してこの土地に居住し、最上・村山方面からきたという苗字がある。また、大きくなった農家から分家して「新家」になった家も多い。これらはこの村の成立と変化を考える時、欠かせない事象だろう。

７、各巻の経本の最後には「天下泰平・国家安穏・家運長久・病災皆除・商売繁盛・蚕養円満子孫相続・為

先祖代々菩提也　　羽州置賜郡米沢城下・取次所・桂屋喜助（点なし）」とあり、病災の「災」の字がわざわざ小さく書いてある。お経を取次ぎしたことになっている米沢の「桂屋喜助」という人のことはまだわかってない。

８、　この地に「大般若経」が入ってきたのは、文久や元治といった幕末から、明治の二十年代までのわずかな期間に集中している。その背景には奥付にある「天下泰平　国家安穏」という願文が示しているとおり、まずは明治維新という未曾有の社会変動による価値の転換、政治と経済の混乱からくる生活不安が考えられる。そのほかには災難除けや無病息災、無論、家内安全や養蚕満足もあるが、いずれも神仏しか頼るものがないのは今と変らないのではなかろうか。

９、　鮎貝の高岡観音堂には「大般若経」を求めた時の縁起書がある。元治年間のものだが、「大般若経」の経巻と経蔵建立の費用を合わせて約九十二両という金額を書き留めている。そこで大雑把な計算だが、この九十二両から横田尻馬鳴堂の建立面付の約六十円（両）を引くと三十二両となり、横田尻の「大般若」面付の三十四両とほぼ同程度の額になる。

10、　更にこの約三十両という当時の金額が、今ではどの程度のものになるかと考えてみると、現在の「大般若経」の経巻の一巻を仮に安い方の五千円とすると六百巻で三百万、三十両で割ると一両が十万という数字がでてくる。しかしながら一巻五千円では安すぎるから、八千円とみれば十六万となる。米の相場は乱高下が激しいから一概には言えないが、一両（十万）で米五表は今のように米の値段が下がるまでには、このあたりでもこの値であった。（未）　　（丸川）

■　五・一五事件の首謀者
三上　卓の書　　５

樋口　利夫

五・一五事件について兄は、比較的に早い時期に知り得たのではあるまいか。特に五・一五事件や二・二六事件では、陸軍・海軍の中の派閥へ彼なりの評価をし、皇道派への傾倒、共鳴を感じたことは十分考えられる。兄の一途な心情が直接的に三上へ接近させたものであろうと思われる。

共鳴の裏打ちが北部十八部隊在籍中の、先に記した山形高等学校の森先生の史観や、西郷隆盛の存在、幕末から維新にかけて幾多の俊秀が海外へ目覚めて行動するなど、当然、兄をして目を開かれる契機であったと思う。

もう一つ兄を引きつけて離さなかったのは酒田出身の石原莞爾の編んだ『世界最終戦争』で、石原の軍事思想の一面を知ったことも挙げねばならないと思う。石原については、三上との接点が直接あったかどうかは、推論も困難だが、この将軍の軍事思想へ傾斜、理解もなくはないところであろう。石原が満州建国は満州人自らの運営を重要視するとしたことも、後に東条との確執を生じたことの一因であった。

兄が石原を敬服していたとは思えないが、心情的に三上に傾いた理由がもうひとつあるように思う。それは当時の私には全く知り得なかったことであったが、兄が冬期間、関東地方への出稼ぎに行ったことで、三上との直接の接触を通して自分の考えをぶつけ、そして、諭されたことがあったのだろうということである。

このことは手元に残っている三上からの葉書や手紙の中で、三上の死去を聞いて兄が弔意を表したことに対して、三上家からの丁重な挨拶からもうかがい知ることができそうである。

三上は戦中から二十年の敗戦に至るまで入獄生活だったが、敗戦による出獄で社会復帰を果たし、生業をつづける中で、再び戦前と同様の事件にかかわったことは衆知のことである。彼の執念をここに見ることはできるが、兄にすればこれまた共鳴せずにはいられなかった事柄だろうと推し計られる。

以上、一介の農民にすぎない兄としては過ぎた行為であったと思う。要するに兄にとって三上は農への思いだけでなく、世の中に横行する不当なもののありよう、生来、貧なるが故の憤りを率直に語り、聴いてもらえた数少ない人物であった。そして、そのことが三上へ傾倒させたものと思われるのである。　　（終）